

自分らしく生きたい——すべてはそこから始まった

「この世でたった一人の存在である私として、ただ自分らしく生きたい」

薄汚れた原稿用紙にそう書きなぐった文章から、社会人畑恵としての第一歩が始まりました。

NHKの採用試験で出題された小論文。制限時間の半分も経たぬ内に、あらかじめ用意してきた文章をもとに模範的ながら面白みのない小論文を書き上げた私は、心の底から突き上げてくる虚しさで憤りが入り混じった思いにさいなまれていました。

「テレビ朝日もフジテレビも最終面接まで残って、結局、不合格。きつとNHKだって同じ結果に終わることだろう。それなのに私は、まだこんな見かけだけキレイごとを並べた、なんのファッションもメッセージもない文章を書き綴っているのか」

にもかかわらず、NHKは私を採用してくれました。後々、試験に関わった方から伺った話ですと、私が合格となった決め手は小論文での高得点だったそうです。私の心の叫びを受けとめてくれ、しかも評価して下さったNHKには、今でも足を向けて眠れません。

しかも、採用となった職種は自分自身が第一に志望していたディレクターではなく、アナウンサー。ちなみに各TVキー局を毎年1000名以上の女子大生が受験しますが、この年のNHK女子アナウンサーの採用はたった1名でした。

“自分らしく生きたい”——ただそれだけを願う一念によつて導かれたNHKアナウンサーという仕事から、私は社会人としての一步を踏み出しました。

それからおよそ20年。40歳代にも入り最近折にふれ、人生の折り返し地点を自分が曲がったんだということを、身体や心の変化から実感します。

NHKから、フリーランスのキャスター、パリへの移住、帰国後は国会議員、その間に結婚もしてと、あらためて振り返ってみると確かにかなり目まぐるしい20年の月日だった気がします。ただそれもこれも、不器用ながらとにかく自分らしく生きたいと願い、その

思いのまま愚直に進んできた結果であつて、四十路を歩き出した今にして思えば、もう少しゆつたりと穏やかに時を過ごし、じっくりコツコツと積み重ねる生き方を自分が選べていたら、今よりはいくらかましな人生になつていたかもしれないと思わないわけでもありません。

ただ、何か運命の岐路のようなものに出くわした時、より私らしい選択はどちらかと自問自答すると、その答えは決まつて平穏で楽な道ではなく、険しく大きな困難が予想される道でありました。もちろん私もきわめてずばるな人間ですから、苦勞をしたり辛い思いをするのは正直言つて嫌です。できればそうした選択は回避したい。けれど自分自身をごまかしたり、自分自身にウソをついてまで、運命から逃げることだけは決してしたくないと常に思つていました。

なぜなら、そんなことをしたら、自分が自分でなくなつてしまうからです。

ちよつと格好をつけた言葉を使わせていただけば、自分の人間としての尊厳を守る生き方を選ぶと、おのずと現世的な損得勘定は二の次、三の次になつてしまつたということでしょうか。

こんなまどろっこしい生き方は、何事につけライト感覚が主流の現代にはまったくもって時代遅れなのかもしれません。けれどいくら他人から誉められたり、世間に評価されたところで、自分自身が心の底から幸せと思えて満足の行く人生を送らなければ生きてきた意味は得られない。私はどうしても、そう思えてしまう人間なのです。

ただどんな時代でも、自分自身を貫いてまさに自分なりの人生を生き切っている人というのは、年齢や性別、人種や職業に関係なく、皆キラキラと輝いて美しく活力に満ちていて、周りの人たちにまで元気を与えてくれるものだと思います。

以前、イギリス大使館でお会いしたサッチャー元首相も、当時既に70歳を越えていらつしやつたにもかかわらず、そのパワーに満ち満ちた圧倒的なオーラは現役の首相として活躍の時となんら変わることもなく、思わず息を呑むほどでした。

フルコースのダイナーをペロツと召し上がった後、サロンで食後酒としてオンザロックのウォッカを所望されたのですが、グラスを手にするやクイツと一気に飲み干してしまいます。すぐお代わりを持って来ますが、手にするやまた一息にクイツ。そうしながら、今

日のスーツの布地はインドから取り寄せたものなのよ、などとさすがベストドレッサーの誉れ高いサッチャー女史らしく、政治や外交の話題だけでなくオシャレの話にも花が咲きます。同じ席には海部俊樹元首相も招待されておられました。彼女が海部氏が自民党から他党に移ったのが納得できなかったらしく、しきりに論戦を仕掛けています。丁度そうしたところに通りかかった新人議員の私に、女史が話しかけました。

「あなたはコンサバティブ（保守）だったわよね」

「はい。新進党を経て、現在自民党ですが、一貫して保守主義です」と私が答えるやいなや、間髪いれずサロンに響き渡るような、朗々とした声で一言、

「You are right!（あなたは正しい）」

あんなにも自信と確信と強靱な意志に満ちた言葉を、私は聞いたことがありません。

「鉄の女」と異名をとったサッチャー女史ですが、あの強さとは自分を信じる力の強さ、自分が正しいと信じるところのものを信じ抜く強さであることを、改めて教えられた瞬間でした。

サッチャー元首相のように世界的な活躍をしなくとも、自分を信じ、自分に与えられた

感性や頭脳などの能力を懸命に活かして自己実現をはかり、世の中に貢献している人は数多くいらつしゃいます。NHKの「プロジェクトX」を見て、多くの視聴者が感動するのは、そこに登場する名も無い人々が自分に与えられた天からの使命の達成を目指し、信じる道をひたすらに突き進み、あらゆる運命に捨て身で立ち向かってゆくからでしょう。

私はすべての人間には、この世で「果たすべき使命」とそれを「果たしうる能力」が備わっているのだと信じています。人間社会でまかり通っている常識からすれば、あたかも能力が劣っているかのようにみなされる人たちにも、能力が高いとされる人たちとまったく同様に、それぞれに使命と能力が与えられていると信じています。ただ、そうした力が遺憾なく発揮され、使命を果たしうるには、それぞれの人が真に自分らしく生き、完全な自己実現をはかる必要があるのだと思います。

私の人生のようにちつぽけで、取るにたらない人生にさえも、何かしらの使命と能力が与えられており、だからこそ生きる意味がある。そしてそれは自分らしく生きてこそ実現される。そうであるからこそ、私はどんなにこづかれ、罵倒されようとも、やはり死ぬまで自分自身でありたい、自分らしく生きたいと、ただそれだけを願うのです。

自分らしく生きたい